
型破れ、

暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
型破れ、

【Nコード】
N20860

【作者名】
暇人

【あらすじ】
――不景気の世の中。
簡単にいうと今この世界よりも少し変わった世界。
これは、

その世界でふて腐れながらいきる少年と、
別の世界から来た少女による、
愉快かつ不愉快な物語。――

第一型 第一話（前書き）

はじめまして。暇人と申します…

最近からからでしょうか…

ここ最近の小説、アニメ、マンガの形に似たものが多いと思い始めました。

“正義”、“友情”、“愛”、“希望”そして“萌え”…

まあ自分が言いたいことを簡潔に言っただけ…

“どれもいい加減見飽きてきました。”

そこで自分はそんな形をほとんどと言わんばかりにブチ壊し、新しい形の小説を作りたいと思いました！

そんなわけでこの小説は、“現実”、“汚れた（けがれた）感情”、そして… “型破り”！！

をテーマにいままでにない物語を！

世界を繰り広げていきたいと思います！！

…ま、所詮ヘタレが書くただの妄想なので期待しないでください…

へへっ…ごめんなさい自分まだ若いのに結構病んでます…

でも、いろんな人に見ていただけると光栄に思います！

ぜひ、ご精読お願いします！！それではごゆっくり！！（、・ω・

）

第一型 第一話

―世の中は都合のいいようにはならない。そして理不尽がある。それが本当の現実だ。―

十字路でぶつかった人と交際にいたることはほぼない。ちょっとしたことで特別な能力を身につけることもほぼない。

そして人がなにも使わずに空を飛ぶことは“ほぼ”というより“絶対”にない。

だが社会はそんな事を望む。子供だけではなく大人までも。

なぜ子供は信じてしまうのか？なぜ大人は子供に真実を語らないのか？なぜ人はそんな“夢”を見るのか？なぜ人は“現実”を否定しようとするのか？

そこから現実と人は非情なように思えてくる。

そんな事を考えながら俺は街並みを歩いていく。

多分こんな時間に俺が考えていることはほとんどの人間が理解できないだろう。

むしろ理解しようとしなない。

10時24分。人影が全くなく、道も少し薄暗い。

嫌な静けさだな・・・と思いながら顔を少し下に傾け、足の動きをはやめた。

すると、視界の中にやたら大きい羽が舞い込んできた。

顔を上げると、そこには・・・えー・・・っと、何から言えばいいのだろうな・・・。

まず現代のファッションにはない服？いや衣装みたいなものを着ていた。

さらに背中に大きな一對の翼が生え、

月の蒼白い光を浴びながら宙に浮かんでいる、
近いものに例えると…「天使」だな。
そいつが俺の目の前にいた

そいつは俺に言った

「世界が今、とても危険な状況にさらされています。どうか私に力をかしてくださいませんか？」
と。

そしてこのあと俺が迷わず言い放った言葉で、不愉快極まりない物語が、始まってしまった・・・。

「断る。」

第一型 第二話（前書き）

今回は前回で突然舞い降りてきた「天使」を主観にして書きました。
ストーリーは進みませんが、三話の方も近いうちに投稿しますので…

第一型 第二話

―上手くいった。

私は心の奥底で歓喜していた。

通信教育で習得した“テレポート”は、普段は晩御飯を食べる際にお茶を用意するのを忘れ、冷蔵庫に向かうときにしか使っていないかったが、なんとか空間を超える事ができた。

翼でのボバリング（空中で静止すること）は家で飼っているおっさんみたいな妖精がやっているところをよく観察してコツをつかんだ。そして、さっきやった言葉のかけ方。あれはハローワークのバイトでよくキャラを作るときにやる口調で自信はあった。

なんかもう一回言いたくなってきた・・・。

とにかく今は順調だ。このペースで頑張らなければ・・・。

おそらくこの子は今私の風貌と私が言ったことに戸惑っているだろう・・・。

資料によれば正義感の強い子らしい。

このままの口調で説得すればなんとか承諾してくれるに違いない！とにかく“奴”が来るまでに味方につけ、“奴”を倒してもらう。

そしてこれからの主な活動を説明し、

洗脳完了！

愉快的物語の始まりい！

どうしようテンション上がってきた！

一段落ついたら何しようかなあ・・・。

とりあえずこの子と・・・

仲良くなって・・・

それで・・・

い、いろんな...ことをお...

「断る。」

へ？

第一型 第三話（前書き）

こつから話が進んでいくわけです…
ご覧あれ。

台詞を表す「」の「」の部分がないところはそのあとに別の人物の返答などが素早く返ってくることを意味します…

例：「〜」「…」「↓」「〜」「…」

わかりやすい例：「な〜、消しゴム貸して〜」「やだ。」

？「な〜、消しゴム貸して」「やだ。」

お分かりいただけたでしょうか…？

あと スズナ「舞い降りてきた天使の名前 です…」。

第一型 第三話

スズナは口を開けたまま呆然とした。

え？

今なんて言ったの？

は？

断るって何？

どゆこと？

ン？？？

彼女が混乱している最中に少年は彼女を避け、さっきと同じ速さで歩いた。

関心を少しも感じてはいなかったらしい。

混乱しながらもスズナは少年の肩にあわてて手をおいた。

「ちよつと待つて！」

少年は横を向いて彼女を見た。ため息をついた。

「何ですかまつたく…。断るって言ったでしょう…。どうせあれでしょ？「契約してください」っていうでしょ。いやに決まってるじゃないですか…。ていうかなんでそんな紛らわしいやり方してるんですか。なんでセールスマンが余計怪しい格好して勧誘なんかしてるんですか？コスプレ会社と同盟でも組んだんですか？世も末だなまつたく…。大体さ…」

少年が敬語な割には憎たらしくと言っていること彼女は聞かず、

「うるさいですよ！！私が言ったことちゃんと聞きました！？いきなり断るってどういう意味ですか！？少しぐらい戸惑いなさいよ！」と混乱が解けないまま指をさして叫んだ。彼女も敬語な割には落ち付いていなかった。

「戸惑えってどういうことですか…。セールスマンが普通そんな態度とりますか？もしかしてバイトでやってんのかあんだ？時給2万円とかだったら騙されてるよ。気を付けな。」

と少年は静かに返答した。敬語がなくなった。

「さっきから何言ってるんですか！？全っ然聞いてなかったようです。すね！もう一度言いますよ！今世界は…。」

「うっせえよいいんだよもうそんなシチュエーション！仮に俺があなたと契約したってなあ、世界が変わるはずがねえだろうがこのご時世ずっと不景気だろうが！！じゃあ早くてめえのいる世界に帰れや！！」

と少年は完全に彼女の方を向いて叫び返した。

スズナは絶句した。

何これ？なんなのこれ？

あ分かったぞ。

これがあれだ。あの…なんだっけ？あつ、カルチャーショック。カルチャーショックってやつか。うんカルチャーショックだあうんそうだよきつとそうだあはは、アハハハハハ・・・。

と「混乱」というよりも頭の中が「混沌^{カオス}」でいっぱいになった。その隙に少年は歩いていった方向に振り向き、さつきとはやや早く歩いた。

「あちよ、ちよ・・・ちよつと待ってえ！」

彼女は頭がカオスなままあとからついていった。

第一型 第四話（前書き）

投稿の間隔はこれぐらいでいいでしょうか…

多分大丈夫ですね。

まあ一話ごとに展開が1つできるように書いていきたいと思っています…

み、ひねった。

少年はシエルターを下から引き上げた。するとガラスでできたドアがあらわれた。

少年はドアを引くのではなく、押して中に入った。

「あ、ちょ……」

スズナは少し戸惑ったが少年がガラスの向こう側から手招きをしたのでスズナも中に入った。

スズナが中に入ると少年は内側から鍵をかけ、すぐそばにあったスイッチを押して、中を明るくした。

そこには業務用の机で作られたカウンターのようなものがあり、書類がそのカウンターと部屋の側面にあり、奥には二階に繋がる階段があった。

そして部屋の中には何も動く気配がないかのように物静かな雰囲気漂っていた。

少年はゆっくりと歩いてカウンターの椅子にドサツと座った。半円はスズナの方を向いた。

「で？なんか言いたかったんだろ。続けていいぞ。」
妙に優しくなった。

スズナはナメられていると思い、顔をしかめて言った。

「私の名前はスズナ！……す、スズナあ……スズナ・グリーン・ランセル・ベ、ベリゲス！ランセルって呼びなさい！見ての通り、私はそう！あの“天使”と言われる者の1人よ！好きな食べ物
は練乳だ！どうだ！驚いたか！」

他にも何か言おうとしたが思い付かなかった。

「……」

零次は空気を整えるためにしばらく黙った。

「……」

零次が横を向いて言った。

「絶対名前今考えたろ。仮にその名前だとしてランセルって呼びた

くねえよ。スズナがグリードって呼ぶからな。てゆうかすごいな。天使って“飲み物”を“食べる”ことができるんだ、へーなるほど

…」

「む…」

やっぱりま一言二言多く、皮肉屋のままだった。

「そ、そ、そうよ！すごいでしょ！でもグリードって嫌よ！男っばいじゃない！」

「ランセルの方が男っばいだろ！じゃあスズナ

「スズナもだめ！ベリゲスならまだマシじゃ

「どこが良いんだよそれじゃバケモノみたいだろうが…」

「むう…。」

「・・・まあどうでもいいか。」

スズナは慌てて喋ったせいかここで少し黙ってしまった。いろいろミスができたことを知り、理想の口調はどこへ行ってしまったのか？今順調なのかと考え込んでしまった。彼女も目が半円になりそうだった。

その間に少年はカウンターにあった眼鏡をかけてまた彼女を見た。するととっさに言った。

「あれ？」

「なに？」

スズナはもう期待しないかのように振り向き、目を合わせた。

零次はスズナの体の上から下までジロジロと見た。

「な、なにつたら！」

そう言われたあとにスズナを見つめて言った。

「…なんかさ、本当に天使っばいな。」

「え…」

第一型 第五話（前書き）

少し投稿遅くなりました…

第一型 第五話

電気がついても少し薄暗いこの部屋で少年とスズナは見つめあっていた。

「ど…、いきなりどうしたの…?」
ぎこちなく問う。

「いやなんかさ、その着ている衣装も何かの布とかテキトーに作られていると思ったがよくできてるように見えるし……。今一番驚いているのはその羽だな。いや翼って言うべきだな……。とにかく、なんかリアルだ。」

……

「さ、さつきからそう思ってたでしょ!」

「いや、今これかけて思った。」

かけている眼鏡のふちをさすった。

こんな展開は予期しなかった。まさか向こうからくるとは…。

「じゃあ!私のこと信じてくれる!?」

いきなり目を輝かせた。

「どうかなあ…。まあ無理に疑っても疲れるし…。本当なのか『こっこ』なのかはもうどっちでもいいや。」

少年は目をそむけた。

「ホントに!?」

「ああ。その代わりちょっと俺の都合に合わせてくれ。」
「?」

また皮肉でも言うのかと少しドキツとした。

「さつき初めて会ったときに言ったこと…。あれをこっちの『依頼』として引き受けさせてくれないか？」

少年は人差し指を下に向けた

「え？どういうこと？」

「あそつか。たしか看板までシエルター張られてたか…。」

「？」

少年は机の引きだしから名刺らしきものをとりだし、彼女にわたした。

「まさかこれが役立つとは…。客にもあまり配らないし…」

「？…なんて読むのこの漢字？」

「『しより』だよ！処理屋！…何でもやる店って意味でさ…。俺が営んでるんだ。ただ報酬は納得するものじゃないと引き受けないようにしている。」

「一人で！？」

「あ、ああ…。」

「バイト！？」

「違う！俺が主だ！」

「営業時間は！？」

「えっと…」

年収いくら！？募集あるの！？

「あつ、ちよつ」

時給は！？シフト制！？具体的に何するの！？

「あのさ」

「楽しい！？ねえ楽し

「うるせえ！！」

机を思い切り叩いた。少しへこんだ。

「あうっ…。」

「そういう質問は後でいい！それよりお前の事情をさっさと話せ！」

「はっ、忘れてた！」

「・・・早くしろ。」

少年は冷静になった。スズナも冷静になるために深呼吸をする。
すう

「早くしろつつつてんだろぅがあっ!!」

机をまた叩いた。もっとへこんだ。

「あ、ごめん…」

「ったく…」

「…随分長い話になるけど覚悟できてますか？」

「ああ。」

「…えゝとまずは…」

「…ご、ごめんなさい」

スズナはポケットから作文用紙を出した。

「てめえ…!!」

「だって何から話せばいいかわからないんだもん！だからちょっとメモ読まして…」

「だもんじゃねえ！やっぱてめえどつかの回し者だろ！！」
さすがにまたキレた。

「ち、違いますよ私はあなたの考えてるような者では…」

「なんだその言い方は失礼だろ！いい加減タメ口か敬語かどっちかにしろ！」

「…じゃあタメ口でいいスカね？えへへ」

「コイツッ…！」

RR、RRR、RRR、RRR、RRRRRRRRRRRR！！
突然防犯ブザーのような警告音が部屋中に響き渡った。

「！？」

「確定だな…！とっとと出ていけてめえ！！ていつかつるせえよ！早く止める！」

「鍵貸して！」

「あ？」

「あ、いいから早く！」

「あ、ああ…ほら」

少年はさっきの鍵を渡そうとしたが、スズナは走って二階にあがった。

「おいっ！？」

二階の部屋から網戸を見つけ、そこからベランダに出たスズナは「翼」をひろげ、勢いよく羽ばたいた。

（もう来たの！？こんなに早く！？どうしよう…！！？）

月が東に傾むき、街の空は一層蒼くなっていた。

第一型 第六話 前半（前書き）

遅れてごめんなさい！

なんかいろいろあったもので…

ホントにこの小説を見ていて楽しんでいた人にはホントにごめんなさい…

これから頑張りますので最後までご精読お願いします！！

今回は長くなってしまったので前半と後半に二分割します。

第一型 第六話 前半

どこっ…！？

さっきまで力強く羽ばたいていたが、そのせいで息が上がってしまった。

それにしてもこの街は結構大きい…。

おまけに高いビルもそれなりに並んでいる。

探すのにひと苦労だ…。

さっきのセンサーが鳴り止んだってことはもう出現しているはず。

ただどあんな急に鳴るなんておかしい…。

なんか変だ。

そして順調にいかない…。

…

くう…！くやしい！

でも頑張る！！まずは

GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！

ふわあっ！？何今の音！？

…あっちからした！

スズナは急いで音が響いた方向へ向かった。

「いた…。」

ビルの影からそっと眺めると、それはビルと住宅街の間に挟まれている大通りにいた。

禍々しい体躯をしていて前足が太木のように太く、少し小さいがこもりにも似た翼が生え、顔は人に似ているが厳つく、大きな角が二本とんがっている。

あれが「悪魔」……。いや、悪魔の使いの召喚獣「魔獣」か……！！

魔獣は身体全体をイラついているかのように震わせている。今にもそこら辺の建物を壊しそうだった。

それにしても図体が大きすぎる…。十階立てビルの半分はある…。

でもやっつけないと！

さっきのやつの説得はなんとかなる！

ちよつと計画が崩れるけど…今優先するのはアレをやつつけること！
よし！やるぞ！

スズナは右のポケットから改造されたMDプレイヤーものを出した。狭い側面に銃口のようなものがついている。続けて左のポケットからMD-ROMをとりだし、さっきのMDプレイヤーに入れた。するとスズナは魔獣に向かって、急降下した。

「暗黒ノ生ミ出シモノ、今我ハソレヲ神ノゴ加護ト信仰ニヨツテ討チ滅ボサン……」

急降下している最中にMDプレイヤーからはなにかの前触れを感じさせるものが流れている。人の声だ。次第に銃口からエネルギーや
ら気やらがたまっていき、輝いていく…。

魔獣は視界に入ったスズナに気付き、さっきのようにもう一度吼えた。だがスズナな怯まず、魔獣の前で地上に足をついた。

それと同時に前触れが終わり、スズナは魔獣に向けてMDプレーヤーを持っている右手をかざした。

スズナは叫んだ。

「くらえ！ぶらすとふねーいむー！」

銃口から光の弾が放たれ、魔獣の頭に直撃、そして大爆発が起きた。

スズナはすぐにMDプレーヤーをポケットをしまい、両腕を右左に真っ直ぐ伸ばし、手のひらを広げた。

「てやあつ！」

すると街中が一瞬オーラにつつまれた。

そしてスズナは腕を組み、仁王立ちした。

どうだ！これが録音製S級呪文の威力だ！録音だけであって本物の呪文より威力は劣るが私が口で言うよりは強い！総合的にも相当ダメージは与えられるはずだ！これでやつの角は両方とも折れているだろう！そしてさっき張ったのは私が一番得意な「大結界」！！これでこの中でのやつの攻撃で建物が壊されても、現実の世界では壊されない！つまりここはやつを倒すためのフィールド！

ようするに説明しています

残念だったな魔獣…。さぞかし怒り狂って存分に暴れようと思っていたようだがそうはいかない…。

何故なら私の手によって貴様は消え失せるからな！

どんっ！

（おっしや決まったやつた読者からの人気ゲツドだ！ヤッフオオオ！）

完全にどや顔をさらけだしていた。

その上で心の奥底で躍り狂っていた。

そうしていると、爆発によって生じた煙から大きな影が見えてきた。すると煙から二本の角がピンと尖って出てきた。

「はれ？」

第一型 第六話 後半（前書き）

さっきの続きです。

第一型 第六話 後半

次の瞬間、魔獣がこちらめがけて突進をしてきた！

「うわあ！」

スズナは慌てビルとビルの合間に入り込んだ。すぐさまにまたMDプレーヤーをとりだして再生した。そしてまた大通りに出た。チャンス！背後とった！

…く、呪文が唱え終わるまでに間に合わない！

ええい！早送りい！

…あ。

早送りボタンを押した。なにやらMDプレーヤーに亀裂ができ、電気が吹き出し、

「あつ！まずッ

きゅいーん、ばぼーん。

爆発した。

こつばみじんになった。

「あ、ああ、ああ・・・。」

スズナの顔から冷や汗が溢れだした。

“呪文は絶対にハシヨらないでください”

学校の教科書に太い蛍光ペンでなぞったところを思い出した。はっと気づいて前方をみると魔獣の姿がなかった。

自分の身体に大きな影が被さっているのに気づいた。

上にいた。恐らくあの跳んだらしい。

凄まじい勢いで落ち、地ならしをおこした。

大きな前足、いや腕から間一髪で避けたスズナだったが、一気に力が失せ、内股になって腰を抜かした。

MDプレーヤーは踏み潰され、跡形もなくなっていた。

冷静になろうとした。

なって一つ分かった。

“今自分は無力だ”と・・・。

魔獣はもう一つの腕を振り上げた。振り上げた腕の拳はスズナに向かっていた。

これから・・・

頑張ろうと思ったのに・・・。

思わず閉じた目がもう一回開けた。顔は無意識に下を向いていた。すると、視界にノートぐらいの紙が入り込んできた。

それとペンと印鑑も。顔を上げると、あれ？なんだろう？

なんか何処かで見たことがある・・・。

まず上から薄いジャージを着ていて、下はポケットが多いズボン。若干髪がボサボサ。

そしてそのズボンに長い鉄の棒をひっさげている、私と同じぐらいの少年がいた。

少年は左手を持て余し、右手で召喚獣の大きな拳を悠々と抑えている。

少年は言った。

“ 依頼の内容、名前、あと印鑑が必要だ。はやくしろ。
私は迷わず言った。”

「 え？ 」

絶望に溺れていた目に光が満ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2086o/>

型破れ、

2011年4月14日21時40分発行